

副テーマ報告

言語接触の文献調査

指導教官 橋本敬 助教授

北陸先端科学技術大学院大学
知識科学研究科知識システム基礎学専攻

050068 原 基

2001年3月

総論

言語接触に伴う複雑な変化を考察することより、我々は言語のもつ本質に迫る事ができるであろう。

過去において、その変化を考察する方法としては、歴史言語学的アプローチである言語資料からの内的再構築等による方法しかなかった。この方法では資料として残された記述上の情報をもとにその特徴的变化を類推する事しか出来なかった。それゆえ、実際に言語変化に関した要因は何であったのか具体的に言及する事はできないのである。

それでは、真に言語変化要因を探るためにはどうすれば良いのであろうか。最も有効な手段と考えられる方法は、社会的ダイナミクスの枠組みのなかで、言語活動を人間の活動の一つとして捉え、言語の変化現象を実際に観察することであると考えられる。また、人間の言語活動を社会的枠組みの中で考えると言う事は大きく別けて2つのレベルでの見かたが必要となる。

一つは人間の言語獲得（母語と第2言語によってその特徴は異なる）の能力という個人レベルでの見方である。もう一つは、言語活動を行なっている集団の個体数変化、年齢的違い、世代交替というコミュニティレベルでの大きな見方である。

具体的に、言語接触の変化を考察するために、ピジン・クレオールを題材にする。

したがって、個人活動のレベルにおいては生まれ出でた赤ちゃんがどのように言語を獲得するのか、第1言語と第2言語獲得それぞれの際に関するバイアスの違いは何かを考えなければならない。

集団活動のレベルにおいては理想的な集団を維持するための死滅する個体と生まれる個体の割合や、若い個体と年よりの個体が集団内での言語獲得に関する役割をどのように演じているかということ踏まえた上で、ピジンからクレオールへの変異はいかに成されたのか考えなければならない。

そこで、上記の要件を満たし、また言語接触による変化を通辞的に観察する有効な手法として、コンピュータシミュレーションの利用が考えられる。

そして、結論的には妥当なコンピュータシミュレーションモデルとは、以下の4つの点を考慮して実装したシミュレーションとなる。

- 1・ピジン・クレオールを獲得する際に考えられる発話者を取り巻く環境からの制約と人間の言語獲得機能による制約について
- 2・上位語と下位語と相互間での、情報とベクトルの向きと大きさ
- 3・言語接触によって被った変化が言語の普遍的傾向に由来するものなのか又はそうではないのかの判断
- 4・言語変化におけるダイナミックな動きと身体性と認知の非分離性の考慮

1. 研究の目的

自然言語が変化するという事実は疑いえない。歴史言語学によっていかに精密に言語変化の過程が記述されようと、言語がそもそもなぜ変化するのか、あるいはなぜ変化しなければならないのかという問に対する答えを得ることは難しい。したがって言語の本質を解明することによってのみ、その変化を惹起する要因を明らかにすることができるであろう。逆に言えば言語の変化現象を考察する事で、言語の本質に迫る事が出来るのである。

しかし、実際には限られた時間の中で、言語変化という長い期間を要する現象を考察することは容易な事ではない。そこで、言語変化の考察する手助けとしてコンピュータ等の利用によるシミュレーションの実装が考えられる。

今回は言語接触による変化の現象を調べ、その変化要因をシミュレートするためのモデルの提案を行ないたい。

以下、2章で何を具体的な研究対象とするのかを明らかにし、3～4章で研究対象として取り上げるピジンクレオールの定義、発生要因や発展過程に関して先行研究を基に議論し、5章で言語接触の変化のモデルを考えるために必要な要素は何かまとめる。そして、5章のまとめを基に6章においてモデルの概略を提示する。

2. 研究対象

まず、言語接触を現象として捉え、実際に研究するにあたり、我々は限られた言語資料しか持ち合わせていないという大きな問題に出くわすであろう。つまり、言語の変化を捉えるには、通時的にどの言語と、どの言語が接触したのか歴史の分かる資料が必要となるのであるが、実際には我々がさかのぼって知りうる言語の歴史は、限られた期間でしかないのである。

そこで、この大きな問題点を補い、通時的に言語変化を考える上で有力な資料と成りうるものとして、ピジン・クレオール語が近年注目を浴びてきている。

なぜならば、ピジン・クレオール言語が成立する初期の段階で、接触した言語それぞれについての情報に関しても、我々が知りうる事が出来るからである。

さらに、ピジン・クレオール語は決して特別な現象ではなく人類が言語を使用するようになってから今までの間、絶えずさらされてきた異言語間接触の一例に過ぎないと考えられるからである。

3. ピジンとクレオールの定義とその特徴

3.1 ピジン・クレオールの定義

ここで、言語接触の研究対象とするピジン・クレオール語について定義しておく。

ピジン・クレオール語をどの様に定義するかは、言語学者の間でも多少意見が分かれるところであるが、以下の定義が言語学者の間で、最も一般的に認められている考え方であろう。

「ピジンとは、共通語を持たない人々の間で発生する。そして、彼らの間で、ある限られたコミュニケーションの必要を満たすために生まれる周辺的な言語である。

また、クレオールとは、ピジンがある言語社会の母語となるときに生まれる言語である。そして、クレオールにおいては、ピジンでの単純化された言語構造は受け継ぐけれども、母語として人間の経験のあらゆる分野を表現できなければならないため、ピジンより精巧な統語体系が発達している。」(8)Todd

3.2 ピジンクレオールの特徴

一般に、クレオールの特徴として挙げられることは人間言語の一般的な役割に関連した明確な単純性である。具体的には(2)Comurieによると、時制 - 法 - 相は動詞前接辞小辞(動詞語根に接頭辞が前置きされるような非自立的な文法形態)の手段を使って表わされる。そして、時制、法、相の3層(正確には前時制、非現実法、非瞬間相としての3層)よりなり形態的に単純ではあるが、意味的には豊かな表現をなし得ることが出来るのである(表1)。その他に、語形変化が少ない、またはほとんど存在しないとか格変化が存在しないなどが挙げられる。

しかし、ピジンの持つ単純性について(11)Romaine は言語学的基準から判断する限り、ピジンもクレオールも単純化、省略、再構築とその過程を通しての混合のような概念で定義付けられるであろうが、ピジンは冗長性が少ないため、他の言語よりも単純化と呼べるかどうか議論の余地があるとしている。

次にピジン・クレオールの特徴として重要なことは、上位語と下位語それぞれの言語の特徴がわかっていること、上位語と下位語という言語間で支配関係が存在することである。

つまり、ピジンクレオールではどのような言語体系の言語同士が接触したのかが知ることが出来る。この事は、言語接触をモデル化し検証するにあたって非常に重要な要素となる。

また、上位語と下位語の関係に支配関係があると言う事は、入力として入ってくる情報の向きや大きさといったベクトルがそれぞれの言語によって異なる事を意味する。

(13)田中克彦によると、クレオール語は2つ以上の複数の発音も文法も全く異なる言語が出会うところに発生し、その複数の言語を仮にAとBとした時、AとBの言語が対等な力を持ちつつ共通に分かり合える第3の言語Cを生み出しても、それはクレオールとは呼べないと述べている。

つまり、クレオールが発生するには政治的、経済的支配関係が優勢な集団の言語と劣勢な集団の言語、言い換えれば上位語と下位語の関係が存在することではじめて成立しうるのである。従って、言語接触に伴う変化を見て行く上ではその異なる力関係にある言語双方のかかわり方が重要となってくるであろうし、上位語と下位語のそれぞれのかかわり方の違いにより、特定の音韻変化、統語変化等が予測されるのである。

例えば、一般的に、接触言語は接触状況にあるそれぞれの言語の持つ共通特徴において築かれると考えられる。つまり、異なる言語が接触した後、ある一方の言語にしか見られ

そうしない特異な現象よりも、双方に共通した特徴の方がピジン化とクレオール化の発展段階の中を生き残る。しかし、それでも、上位語と下位語の関係の仕方により特別な特徴を持ったクレオール語が現れるかもしれない可能性は否定できないのである。例えば、上位語が早くに消滅し、下位語の影響の方が長く続いたら、下位語の文法規則や語彙、音韻を持ったクレオール言語が成立しうるかもしれないのである。

4. ピジンとクレオールの発生要因

次に言語接触によってピジン・クレオールがどのように発生し、またそれらがどのような過程で変化していったか議論してみたい。この議論を通して、接触した言語が実際に、ピジンからクレオールへどのような要因が絡んで成立していったかを考え、言語接触という現象に対する妥当なモデルを提示する上での要点を整理していきたい。

そこでまず、言語接触の初期段階としてピジン・クレオールがいかんして発生したと考えられているか言語学者の代表的な意見について議論をしてみたい。

ピジンの発生に関する説として、(8)Todd に従うと、過去の言語学者の意見は、4つの説に大別でき、それら4つの説の問題点を補って考えると総合説という説が一番妥当であるという。以下に、過去の4つの説とその問題点を概観し、最後に(8)Toddの説である総合説をみてみたい。

4.1 幼児語説

まず、1つ目が(6)Jespersen、(3)Bloomfieldらが唱えた幼児語説である。これはピジンのもつ特徴が幼児の話し方と類似する点から生まれた説である。

つまり、下位言語の話し手が、上位言語を学ぶにあたり、あまりにも下位言語話者の学習が遅かったので、上位言語話者が下位言語話者と話をするとき「赤ん坊言葉」に頼ることがあった。この「赤ん坊言葉」は下位言語話者の不正確な言葉を上位言語話者が模倣したものである。上位言語話者の模倣は決して不正確な模倣ではなく、彼らの上位言語に内在する文法的関係に基づいていた。そのため、下位言語話者の側では正しいモデルを失い、上位言語の単純化された「赤ん坊言葉」を習得するしかなくなったのである。その結果、共約されたジャーゴンとなったのであろう。という考え方である。

この幼児語説の問題点として、次の事が考えられる。

まず、ピジンがある上位言語の幼児語としたら現在、ピジン話者とそのある上位言語話者との会話において、お互いに意志の疎通が困難となることが多いのはなぜか。さらに、異なるヨーロッパの諸言語と関連をもつ種々のピジン、クレオールが、なぜ相互に統語上に似通った特徴を示しているのかという点を説明できないことである。

また、上位言語に内在する文法関係に基づいて、ピジンが成立したというよりは、下位言語話者の文法体系を枠組みとして、上位語から語彙を取り入れて行った側面が大きいように考える。この点について、(15)Wurmも、接触状況において、自分たちの言葉を簡単にしようと試みたヨーロッパ人もいたかもしれないが、わざと体系的に単純化したことも、

学習者のジャーゴンを軽蔑して模倣したことも疑わしく思うと述べている。そして、むしろ、我々が第2言語を習得する際に行なうように、被征服者達は、自分達の文法規則に照らし合わせて上位語を理解したのであって、上位言語に内在する文法規則に基づいて理解したのではないと否定している。

4.2 独立平行発達説

次に、2つ目の説として考えられたのが(4)Hallらが唱えた独立平行発達説である。

これは、世界各地で見られるピジン・クレオールはそれぞれの地域で独立して発生しており、それらの間に類似した現象が見られるのはインド＝ヨーロッパ語族から派生したからであるという説である。つまり、ピジン・クレオール語は単にインド＝ヨーロッパ語族の派生した言語で、それぞれが単独に独立して世界各地で発展しているだけであるという考え方である。

この説の問題点は、確かにピジン・クレオールの持つ類似特徴は上位語も多くがインド＝ヨーロッパ語であったという事実も関連しているかもしれないが、類似特徴をすべてその事実にもとめることは短絡的で根拠の薄いことであろう。また、クレオールに至っては明らかに上位言語の言語体系とは異なる体系や特徴を持っている事実からも単に上位語の派生語と片付けられるものではないと考えられる点である。

4.3 航海用語説

3番目の説は、(10)Reineckeや(9)Matthewsらの説で航海用語説である。

これは航海用語が多くのピジン・クレオールの基盤であったかもしれないと示唆した説である。

つまり、比較的最近まで、船の乗組員達は、通常多種多様の方言や言語を話す男達によって構成されていたので、船上で共通の基本的な言語が必要上育っていった。このようにして航海用語はピジンの核となりそれがさらに使用者の母語のモデルによって拡大されたというのである。

この説における問題点は確かに、船上で用いられた共通の言語自体をピジン的一种と考える事は出来るが、世界各地に見られるすべてのピジンが船上で用いられた航海用語が基盤になっているという確証はどこにもない。もし基盤となっているなら、航海に関する生活を中心とした概念や用語が多くなったり、航海用語に特化した語彙が多い言語となってしまうだろう。また、航海用語説では、異なる言語例えば英語、フランス語、ポルトガル語などを基盤とするにもかかわらず各々のピジン・クレオール言語に構造上多く見られる類似点を説明できないという問題点も抱えている。

4.4 単一起源説・語彙入れ替え説

4番目の説として単一起源説・語彙入れ替え説が考えられる。

この説はヨーロッパの言語に基盤を持つピジン、クレオールはすべて15世紀のポルトガル語ピジンから派生しているとする説である。

つまり、15世紀になってポルトガル人がアフリカの西海岸沿いに航行した時、当時地

地中海沿岸で広く使われていた補助言語のサビール語をつまみ、ポルトガル語に影響を受けたサビール語を用いてアフリカの人達とコミュニケーションを持った。従って、アフリカ人が覚えた最初のヨーロッパ語はこのような言語でありその後、大西洋の島々で支配者であるヨーロッパ人と被支配者であるアフリカ人達のコミュニケーションにおいてもこのポルトガルナイズされたサビール語が用いられたと考えるのである。

そして、歴史的な流れの中で、ポルトガルの影響が弱まり、イギリスやフランスが入ってきてアフリカ人との交流には英語化されたピジンポルトガル語、フランス語かされたピジンポルトガル語が使われたのである。

さらに、語彙入れ替え説が受け入れられれば、この単一起源説はさらに有力となる。

語彙入れ替え説とは歴史的な世界情勢の変化つまり支配民族の入れ替わりに伴い上位語としての使用言語が変化する。それに伴い使われていた語彙が次々と置きかえられて言ったという説で、英語基盤のクレオールであるサマラッカ語の中にまだ、30パーセントのポルトガル語が残っているという事実が好例となるのである。

この説の問題点はヨーロッパ諸言語を基盤とするクレオールと同じ特徴を持つヨーロッパ以外の言語を基盤とするクレオールが存在するという事実を説明できない点である。

4.5 総合説

上記で概観してきた過去の言語学者が考えたピジン・クレオールの発生諸説は、それぞれ問題を抱えている。というよりはあまりにも限られた地域的、歴史的側面でしか、ピジン・クレオール語について考えていない。

そこで、(8)Todd は上記で挙げた4つの説それぞれの問題点を踏まえて、接触状況に適した言語行動は普遍的なパターンつまり、言語本来の普遍的制約によりピジン・クレオールが成立したと考える総合説の方が妥当であると述べている。以下に(8)Toddの説を紹介しよう。

総合説とは、確かに、歴史的経緯もピジン・クレオールの発生に影響を与えたであろうが、世界各地に広がるピジン・クレオールの体系的類似性に注目したらむしろ、人間の言語習得に関係した接触状況に適した言語行動に、その発生の要因を求める方が妥当なのではないであろうかという説である。

この説と同様な立場を採る言語学者としては(1)Bickerton がいる。彼は離れた地域にもかかわらずピジン・クレオールには直接的統語の類似対応があるという事実の観察から、バイオプログラムという生得的なプログラムを提案した。そして、ピジンにさらされた環境の下での子供達は、統語の獲得に際して、不十分なモデルしか供給されないからクレオールの中で明示されうる生得的な「バイオプログラム」に戻ると述べている。それ故、クレオール言語はバイオプログラムから生成されたものより出発して、連続的な歴史的発展を成すというのである。

この(1)Bickerton のバイオプログラムという意見に対して(14)Valdman や(12)Schumann らは(1)Bickerton の言うような生得的な言語能力ではなく、むしろピジン化

のなかで行なわれる成人の第2言語獲得における普遍性であると述べている。つまり、ピジン化と第2言語獲得との平行関係に強い結びつきがあるという意見を打ちたて、他の言語を獲得する際に振る舞われる認知と言語的普遍性を含む二つの過程を主張した。

(14)Valdman らの意見と(1)Bickerton との決定的な違いは、ピジン化の場合は社会的状況によって目標となる言語は決定され、そしてその情報の制約を受ける。クレオール化においてもピジンの言語使用集団の制限された目標言語の変種（例えば音韻の分野では母語の特徴の転移と考えられるもの）がネイティブ化され、そのような特徴の多くを引き継ぐこととなる。従って、後に誕生する単一クレオール話者は彼らが使わなくなった言語の特徴を知らないにもかかわらず、アフリカ言語の特徴をもつことが出来るのである。

(2)Comrie も第1言語獲得と第2言語獲得という言語獲得の状況の違いにおいて、質的な違い、つまり、第1言語の獲得と第2言語の獲得においてそれぞれにかかるバイアスに違いがあるとは述べている。彼によると、ピジンの獲得は人の第2言語獲得と同種で、ピジンからクレオールへの成立過程は、ピジンにさらされている環境の中で、そのピジンを第1言語として子供達が獲得することと同種である。従って、クレオール化はピジンの獲得においては第1言語獲得の際の周囲を取り巻く言語環境の大きなバイアスがかかるが、ピジンに際してはそれに加えて第2言語の持つ構造的バイアスも受けると考えられるということである。

5. ピジン化、クレオール化についてのまとめ

今までは、ピジン・クレオールを中心に、言語の獲得の仕方や、上位語と下位語の関わり方の違いによる影響に焦点を絞って、言語接触による変化要因や過程を考えてきた。

しかし、言語の変化を考える時、言語を獲得する主体である人間の活動の面を考える事も重要となる。つまり、人間の身体性（音素ならその発声に関係する舌の位置等による身体性）と人間の認知との関係を考えることは、言語変化におけるダイナミックな動きを考える場合においても考慮に入れなければならないことであろう。特に、人間がどの様に身体的特徴を使って伝達させる言語情報をどう聞き手側は受取って学習しているのかを知ることにはピジン・クレオールの成立を考える上で必要な要素であると考えられる。

また、人間集団における通時的流れのなかでの社会ダイナミック的变化、つまり、個体数（人間）の変化や、個体の持つ能力の差異性による変種の存在をも考慮に入れて考える必要がある。

以上までの議論を整理すると、言語接触からピジン化、クレオール化に至る発展段階において考えなければならない点は以下のとおりとなる。

- 1・ピジン・クレオールを獲得する際に考えられる発話者を取り巻く環境からの制約や人間の言語獲得機能による制約について
- 2・上位語と下位語の相互間での情報のベクトルの向きと大きさ

3・言語接触によって被った変化が言語の普遍的傾向に由来するものなのか又はそうではないのかの判断

4・言語変化におけるダイナミックな動きと身体性と認知の非分離性の考慮

以上までの議論を踏まえた上で、言語接触現象のモデル化に際し、ピジンの獲得とクレオール成立の二段階それぞれでかかってくるバイアスを考慮に入れたモデル化を行わなければならないであろう。この問題はモデル化に際し、どのようなパラメータと入力が必要であるのかという問題に関ってくる。

6. 言語接触の変化のモデルを考える

まず、言語は社会制度の一部としての情報（意味）伝達的手段であり、情報は社会において生起する広い意味での事態であるから、事態あるいは事態の一部としての個体変化は、言語変化を促す1つの要因となっている。そして、言語共同体内のある集団において発生した言語変化が別の集団、あるいは共同体すべての集団へ伝播することによる言語変化の過程もある。

しかしながら言語変化のすべてが社会的要因によるわけではないことも確かである。つまり、言語はあらゆるレベルにおいて、体系を不完全なままに止め任意の方向への変化を可能にする何らかの力が働いていると考えられる。そして、言語における体系は相互に関連して価値観を規定しあう要素の集合なのであるから、最小の変化であっても、体系全体の性質を変化させるものである。

しかし、言語の体系は常に不完全であり、従って、常に変化への圧力にさらされ、その変化がどの方向に向かうのか不定である。このような体系が相互に絡み合い、社会的要因や言語そのものに内在する性質という要素が複雑に絡み合っている現象に対するモデルを提示することは容易なことではない。

しかし、自然言語の大域的な変化の過程に絞れば、言語変化のモデル化は可能となるかもしれない。

上記で述べた言語変化の複雑性を踏まえた上で、より現実の言語活動に近いモデルを設計するためには、人間のコミュニティにより近い枠組みを持つマルチエージェント・モデルを設定するシミュレートが有力であろうと考えられる。そして、このエージェントにどのような機能を持たすかによって、シミュレートする言語変化の要素が決まってくるであろう。

例えば、世代の違いや個体数の変化を考えるために、子供のエージェントと大人のエージェントを設定し、集団としての個体数は相対的に一定となるように、誕生と死滅を繰返す必要があるであろう。大人のエージェント間での言語による情報のやり取りは相互の言語体系の枠組みを基準にコミュニケーションが取られる。またその情報の媒介には音声情報としてのフォルマントを用いると定性、定量的に情報を表わせるかもしれない。子供の

エージェントは大人のエージェントを目標としてその情報、最初は名詞、基本動作表現を中心に学習していこう。

しかし、この言語習得において英語学を中心に研究されているチョムスキー的生得装置を設定するのが妥当かどうか疑問の残るところである。

しかし、言語獲得に関する何らかの普遍的特性は必要になってくると考えられる。例えば(7)Kuhl&Williams は赤ちゃんの母音認識の研究成果により、赤ちゃんは最初、あらゆる母音を認知出来る能力が備わっているが、6から9ヶ月の間で、自分が生まれおちた言語環境の母音体系に合わせてその認識のバインドリングを変化させるという結論を得ている。この事実は、人間は明らかにあらゆる言語体系に対応できる能力を備えて生まれてくるということを意味している。そして、その能力自体はあらゆる言語体系の違いに関らず存在するものであり人間のもって生まれた普遍的特性といえよう。

また、ピジン・クレオールへの成立過程も考慮しなければならないであろう。つまり、コミュニティの中で、上位語と下位語の政治的、社会的力関係や上層語発話者数（支配者の数）、下層語発話者数（被支配者の数）の関係、それは多分に下層語発話者の方が大きな集団となるであろうがしかし、情報の入力関係は上層語からの入力が大きくなることは想像できる。従って、エージェントの数では下層語発話者が上回るが上層語から下層語への情報入力数の方が多く、下層語から上層語への情報のフィードバックはより少ないものとなるであろう。

この個体数の数と情報の流れの方向や大きさによっても言語変化に対する影響は大きく異なる結果となるのではなかろうか。

以上のことを踏まえて大枠でモデルを提示すると共時的な側面でのエージェント関係は図1のようになる。これが図2の様に世代を重ねて行くに連れて、相対的な集団個数を維持するように大人のエージェントの一部が死滅していく。（ちなみに図1、図2とも情報の量が大きいほど矢印の太さが太くなっている。）また情報のやり取りは基本的には上位語を被支配者層がイミテーションする。そして、そのとき被支配者層は彼らの第1言語の枠組みの中で理解し、それをアウトプットとして支配者層に返す。その情報が正しく支配者層に伝われば、意思の疎通が取れ会話に成功しているという事になる。

非支配者層の間でも互いのエージェント同士で、やり取りを行ない、インプットの強化を互いに図るようにする。

問題となるのは子供のエージェントが大人のエージェントが持つ言語情報をいかに獲得して行くかである。明らかに大人のイミテーションだけではなくイミテーションを通して得た情報を何らかの言語獲得の規則を利用して第1言語としなければならない。そのため子供のエージェントにはどのような機能を持たす必要があるのかまだまだ、研究の余地が必要である。

イミテーションによるエージェントの学習回数がある一定の閾値を越えたら図2のように大人のエージェントの一部が死滅し、子供のエージェントが増えて、世代を交代させて

いく。

以上の様に、情報の流れを中心としたエージェントのコミュニケーションの枠組みを提示してみたが、エージェントそれぞれが持つ機能について細かい点に関しては、まだまだ、研究を重ね規定して行かなければならないであろう。そして、特に世代を隔てて行なわれる情報の受け渡しとその学習に関して具体的にどのような機能をエージェントに持たせればよいのか大きな課題である。

表 1

クレオール諸語における動詞の活用の類似（非状態語）

動詞の形式	ハワイ・クレオール	ハイチ・クレオール	スラナン語
基礎形式	HE WALK	LI MACHE	A WAKA
前時制	HE BIN WALK	LI TE MACHE	A BEN WAKA
非現実法	HE GO WALK	LAV(A) MACHE	A SA WAKA
非瞬間相	HE STAY WALK	L'AP MACHE	A E WAKA

図1 共時的にみた情報の流れとその関係

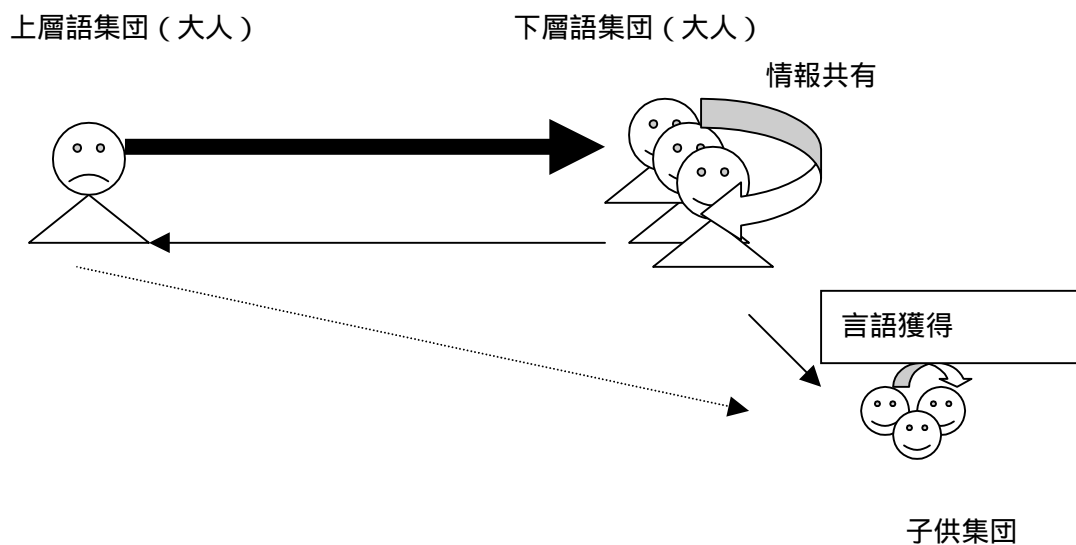
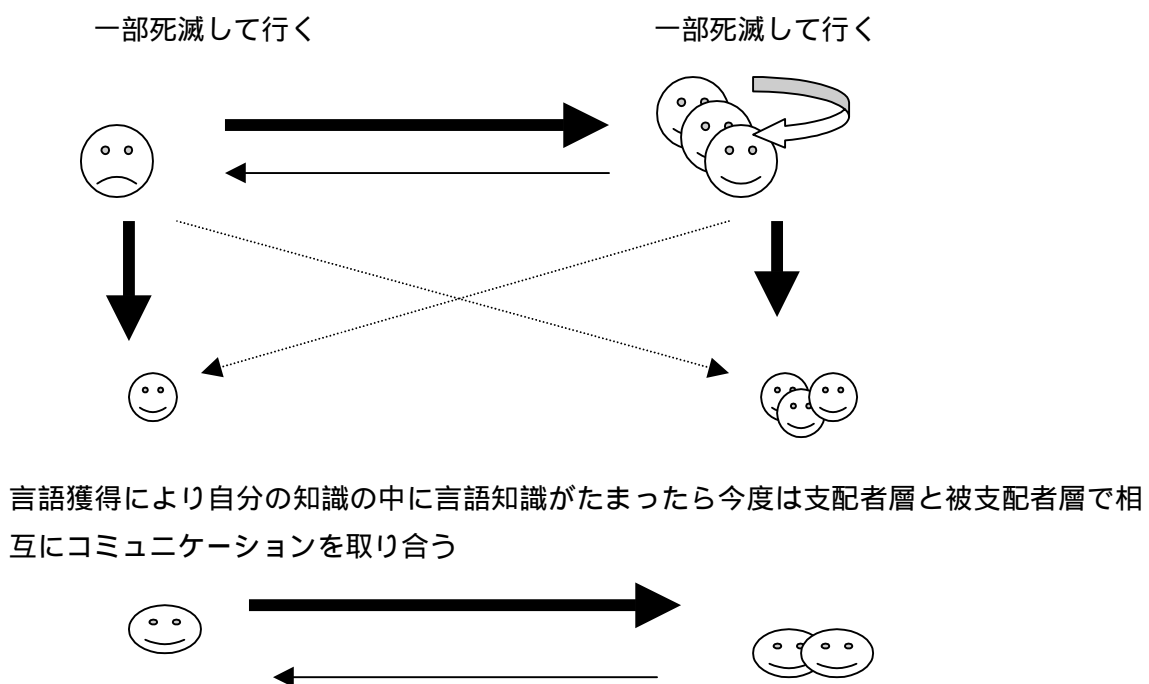


図2 通時的側面からのコミュニティの数の変化と世代交替の関係



参考文献

- (1) Bickerton, D. 「言語のルーツ」 (1985) ; 訳 : 箕壽雄、西光義弘、和井田紀子 ; 大修館書店
- (2) B. Comrie : “Before Complexity” : The Evolution of Human Language, SFI Studies in the Sciences of Complexity, Proc. vol X, Eds. J.A. Hawkins and M. Gell-Mann, Addison-Wesley, 1992 pp193-211
- (3) Bloomfield, L (1933) “Language” London, Allen & Unwin
- (4) Hall, Robert A. Jr. ; “Pidgin and Creole Language” (1966); Ithaca, Cornell University Press,
- (5) J.A. Holm : “Pidgin and Creoles” (1988) : The theory and structure ; Cambridge Language survey
- (6) Jespersen, Otto; “Language”(1922): Its Nature, Development and Origin. London. Allen & Unwin.
- (7) Kuhl, P.K; Williams, K.A. “Linguistic experience alters phonetic in infants by 6 months of age”; Science, 1/31/92, vol.36
- (8) Loreto Todd 「ピジン・クレオール入門」 (1986) ; 訳 : 田中幸子 ; 大修館書店
- (9) Matthews, William. “Sailors Pronunciation in the second half of the seventeenth century” (1935); Anglia vol.47 pp192-251
- (10) Reinecke, John; “Trade Jargons and Creole Dialects as Marginal Language”(1938); in Language in Culture and Society, ed. Dell Hymes. New York Harper & Row, 1964 pp.534-46
- (11) Suzanne Romaine: “The Evolution of Linguistic Complexity”: The Evolution of Human Language, SFI Studies in the Sciences of Complexity, Proc. vol X, Eds. J.A. Hawkins and M. Gell-Mann, Addison-Wesley, 1992 pp213-238
- (12) Schumann, J.H.; “The pidginization process(1978): a model for second language acquisition”, Newbury House Rowley, Mass
- (13) 田中克彦 「クレオール語と日本語」 (1999) ; 岩波セミナーブックス 77
- (14) Valdman, A.; “Creolization and second language acquisition“ in Anderson (1983) pp212- 234
- (15) Wurm, S.A.. “Pidgins, Creoles and Lingue Franche” (1971) Current Trends in Linguistics, vol.8, ed. T. Sebeok, pp999-1021